

作物別技術交流集会報告

すいか

らでいっしゅぼーや(株) 農産部農産管理課 神保 幸子

作物別技術交流集会初の「すいか」編が7月5・6日に開催された。幹事生産者グループの王隠堂農園では、アドバイザーの小祝氏が施肥設計した実験区を設け、土壌分析に基づいた栽培を実践した。大和すいかで有名な奈良県での開催ということもあり、すいか専門の種苗会社の視察も。

Report

今回のテーマは「秀品率の向上」。過去に会員さんからの問い合わせで多かった内容は、割れ、傷み、過熟、空洞。そして今年は、まだシーズン途中だが、多いのは「空洞」と「おいしくない」という内容。対策を話し合った。

■曇天なんかには負けない！  
光合成ができる葉づくり

すいかは光を最も好む作物のひとつ。曇天が続いていても、合い間に射したわずかな光で光合成ができるようなしっかりした葉づくりが必要だとアドバイザーの小祝氏は言う。そのためには、ミネラル先行の施肥と後半まで草勢を保つ追肥が大切とのことだった。

ミネラルの中でも苦土と石灰を切らさないことが大切。苦土は、葉緑素を構成する成分で葉を厚くして光合成を助ける。また表面に出るワックス効果で病原菌の侵入を防ぐことができるという。石灰は、病気に対する抵抗力を持つ葉を作るほか、ペクチン酸カルシウムという細胞と細胞をくっつける接着剤の役目を持つ成分を形成するという。そのため、石灰が欠乏すると葉が枯れたり縮れてカビ菌の侵入を許してしまう。その他、苦土にはマンガンが、石灰にはホウ素が同時に必要となり働きを助けるという。



再三、小祝氏から強調されたのが、石灰は土壌改良剤ではなくて、肥料だという認識を持ってもらいたいということ。ただし、入れすぎは禁物。土壌分析をして、適正な施肥設計をすることが基本だ。すいかの適正なpHは6.5～6.0。栽培のスタートは6.5、そして6.0で終了するのが理想とのことだ。欠乏しないように追肥が必要になってくる。



対照区と実験区との比較を小祝氏が説明。圃場は幹事生産者、王隠堂農園の丸尾栄志郎氏のもの。

■割れにくい、空洞がない、  
酸っぱくないすいかづくり

すいかは少しの衝撃でも割れやすいが、今回視察した「萩原農場」を始め、各種種苗会社では割れにくい品種を開発している。そういった情報を入手し品種を選ぶことも改善策のひとつだ。小祝氏からは、石灰欠乏になると、割れや空洞果や酸味のある実になるとアドバイスがあった。また、石灰欠乏は、エチレンの発生要因にもなり、エチレン感受性の強いすいかは果肉が腐敗したり、シャリ感が失われたりするという。根から吸わせるのが理想だが、間に合わない場合の葉面散布は有効とのことだ。

さらに「最近、有機肥料のすいかは赤色が薄い気がする」という。果肉の赤い色は鉄分で、本来すいかは人にとって鉄分の補給源、栄養価のある作物だ。これには、鉄分を含む

微量要素資材の投入が必要だという。

その他、糖度を上げるには、苦土、カリウム、マンガンの連携が必要なので、いずれも下限値を下回ってはいけないとのことだ。

■来年のすいか栽培に  
むけて

収穫の適期を判断する方法は、生産者によって違った。日数、積算温度、打音、色など様々だ。JA山武有機部会では、個々の生産者の判断以外に、出荷直前に必ず部会担当者が糖度と食味を計測し記録している。そして収穫適期かどうか第三者として栽培者にアドバイスをするそうだ。

来年のすいかは変わっていくはずだ。曇天に負けないおいしいすいかをシーズン終了まで出荷されることを期待している。



すいかの原種。約6000種類ほどかけ合わせた中からたった1種に絞り込み発売する。1品種の開発に約10年かかる。視察した種苗会社「萩原農場」にて。



プロフィール  
しんぼんぼーや  
神保幸子  
らでいっしゅぼーや(株)  
農産部農産管理課  
入社は2000年。  
農産部では情報  
担当。入社前は  
「年1回は南国の

海でボートとして、週末には山のてっぺんの小さな畑を耕して楽しもう」なんて思っていたが、今畑は雑草だらけ。唯一植えてあるエビ芋の生命はいつか。お正月に食べられるか不安…

Report